

## 三歳児のあそびの生活

—あそびを軌道にのせるまで—

守 永 英 子

三歳児のこの一年間の生活をふり返って、その生活の中心をなすものはあそびであった、といつてはいいすぎであろうか。あそびの生活を集団生活の軌道にのせること、そのことすら、三歳児にとつてはむずかしい、時間のかかることである。

家庭の中で暖かく保護されてきた幼い子どもたちが、はじめて親の手もとをはなれ、全くの他人ばかりの中で、一日のうちの敷時間を過ごす——そのことだけでも、子どもたちにとって飛躍的な生活の変化であろう。

そこには、全くさまじまな反応がみられる。朝、母親から離れずにぐずる三月生まれのK、あそびの途中で時々ママを思い出しては涙ぐむM、自分からはあそびせず傍観しているAとH、Hは何に誘っても、「いいの、いいの」とエプロンの裾をあごの下にはさんだま

ま、庭をふらふら歩くばかりだが、時々、何を問うでもなく「せんせ」と声をかけてくる。Aは教師や友だちには関心を示さず、ひとりで庭をどび歩いては、どこかの砂場へでもはいつていつて水と砂でエプロンも靴も泥んこにする。年長児が「あの子、泥かけるんだよ」と、もてあまし顔に告げにくる。本人に交渉しても、無反応でどうにもならないらしい。Yは、教師にばかりついて歩くKが気に入って、かまっては泣かしたり、ふざけて大声ではしゃぎまわったりする。教師のそばで静かにあそぶ子どもや、友だちを作つてあそびにいつてしまう子どももある。

三歳児の生活は、何よりもまず、この幼い子どもたちの社会的適応の第一歩を、滑らかに行なわせることにあるといつてもよいと思う。入園当初の、このばらばらな子どもたちの不安をとりのぞき、できるだけ自分を發揮していけるように方向づけるには、子どもの発達状態に即した扱い方が大切である。ある子どもには、ひとりあそびを満喫させるために、そつと見守つて保護してやらねばならないし、平行あそびの子どもたちには機会をとらえて友だちあそびへのきっかけを作つてやることも有効である。子どもの自由なあそびを誘い出し展開させるためには、広いあそび場といろいろな遊具と、じゅうぶんな時間がいるし、たくさんの子どものが集まっている場所、それぞれの子どもにできるだけ自由なあそびを展開させるためには、いろいろな面の指導がいる。園の生活になれて自由なふるまい方が身についてきた子どもたちは、いろいろな遊具を自由に

使って、いろいろなあそびを楽しむようになるが、それらのあそびの中から、砂場、積木、ままごとの三つのコーナーに焦点を合わせ、その状態の変化を思い返してみよう。

### ○ 砂場 あそび

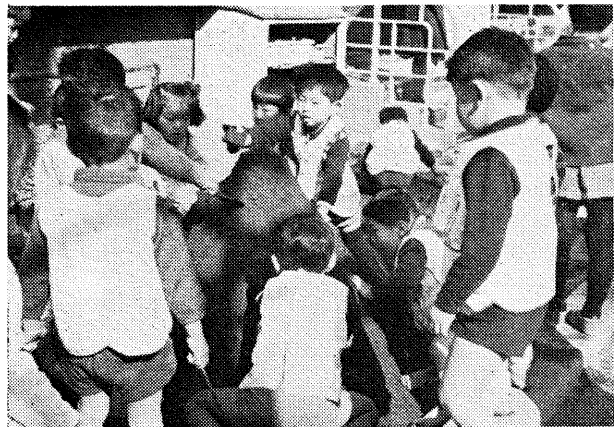
砂場あそびは、幼稚園時代を通じて、飽きることなく続けられる重要なあそびの一つで、入園当初のひとりあそびにも、卒業期の協同あそびにも、その素材は適切に使われる。

砂場の用具としては、しゃもじ、砂型、ます、ふるい、じょうろ、バケツ（小）、木片など。分けあうことのできない子どもたちのために、しゃもじや砂型は、全員が同時に使えるほど数をそろえた。

あそびは、いじったり、こねたりすることが主で、水を注いでどろどろにし「セメントができた」と喜んだり、砂型で作ったアイスクリームを「たべて」と持ってきたり、ケーキと称して、ふるいに砂をつめ小石や花びらで飾ったりする。泥んこのしゃもじが人に触ろうと、バケツの水が人にかかろうと頓着なく、砂をはね上げてかけたり、目に入れてしまったりする。そして、けんかになろうものなら、そばの砂を手あたり次第に投げつける。

砂場あそびを軌道にのせるには、まず自分が汚れないように、袖をまくって身支度をすることや、砂場という枠の中で活動する時の他人に対するエチケットを身につけさせることが必要である。

四歳児もいっしょに作った大きなお山



かけられた方も、わざとしたのではないからゆるしてあげる。  
・ひとの使っている道具がほしい時は、「借して」と断ってから使う。

このような砂場でのふるまい方が身についてくると、子どもたちの間のトラブルはすいぶん減ってくる。

教師が砂を掘ったり、積んだりしているのをみれば、子どもたち

・掘るときは、他人に砂がかからないように気をつける。

・水を運ぶときは、はねて人にかからないように量をかげんし、人のいない所を通る。

・水をあげるときは、バケツを低くする。まちがつて砂や水を人にかけたら、すぐにあやまる。

やっと仲よしになって



○ 積木 あそび

は「先生なにしているの。手伝ってあげようか」と寄ってくる。このように教師を媒介として、他の子どもといっしょに、山を作ったり、トンネルを掘ったり、まわりに池や川を作ったりする楽しい経験は、友だちあそびへのよい刺激となる。子ども同士二、三人集まって、山や池を作るといふこともぼつぼつみられてくるが、まだ教師の仲だちが有効な階段である。春から秋にかけてよくあそばれた砂場も、冬の寒い間は中断されているので、この春、またどのようにあそびが展開されるであろうか、楽しみである。

年間を通じて大へんよくあそばれるが、入園当初、子どもの動き

の少ない間は卓上積木が積み、活動が活発になると箱積木がよく使われるようで、卓上積木は、ままごとのごちそうや、ダンブカーの荷物になってしまふ。

保育室の積木は、小型箱積木一組、床上積木二箱、卓上積木二箱、その他組木、棒積木など。

初めの頃の、ただ積んであそぶ間はさほど目立たなかったけれども、目的をもって作るようになると、自分の使う積木を確保するために激しいものとなった。「船を作るんだから、使っちゃだめ」と自己主張の強いH、どこにあるのかもかまわずに使おうとする無頓着なN。二人とも我慢のできない方で、あつという間につかみ合ひ、顔にひっかき傷を作っただけ帰ることも度々だった。

Nには、

- ・他人の使っている積木をとってはいけないこと
- ・誰も使っていない積木の中から必要なものを探してこること、を話し、Hには、
- ・みんなで使う遊具であること
- ・Hの使っていない積木は誰でも使えること
- ・Hも、必要な積木は、誰も使っていないものの中から持ってくることを話した。

またNは、Hが作っているのを眺めていることがよくあるので、はいりたいときは「入れて」というようにすすめたが、Hは「いや」と拒否した。そこでNに、「先生といっしょに別に作りましょ



頃には、「こうしようか」「うん、でもこうやったらどう」「などと、相手を受け入れたり、ゆずったりして、仲よく船や飛行機などを作ってあそぶ姿がみられるようになった。

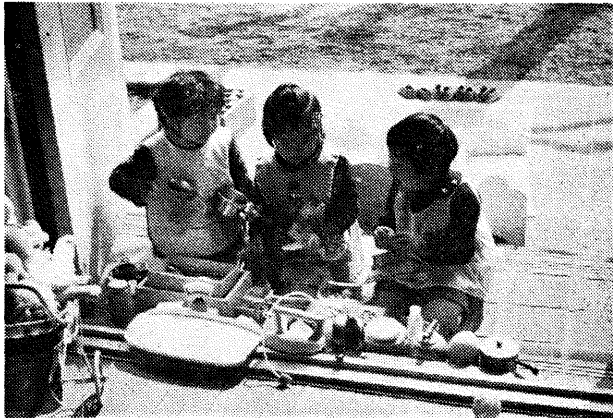
○ ままごと

遊具は、畳一枚敷のコーナーに、戸棚、テーブル、いす、人形の

う」と誘ってみた。あまりあそびの活発でないNを励まし、Hに、教師に咎められてなく自分で行動を決めてほしいと願ったからだったが、Hはすぐに思い直して「入れてあげる」と申しでた。けんかの多かったこの二人は、それだけに接触も多かったようで、秋も終わりに近づいた

ベッド、茶わん、お皿、鍋、やかん、ガスレンジ、電話など。数は多いが種類がさまざまで、他の遊具のように分けて使うことがむずかしいため、友だち関係の調整がいっそう必要である。多いのは、「いれてくれないの」という訴えで、先にあそびはじめた子どもたちが、あとからくる子どもを拒否する傾向がある。そこで、はいりたいときは「いれて」とはっきり意思表示するこ

とをすすめると同時に、  
教師としては  
・ごきを敷くなどして、家を広げてあげる。  
・家族としてはいる余地がなければ、お客さまやお店やさんになるなど、役割を考えて参加できるように、助言  
・強い拒絶の場合  
は、教師と親子



デコレーションケーキを作しましょう

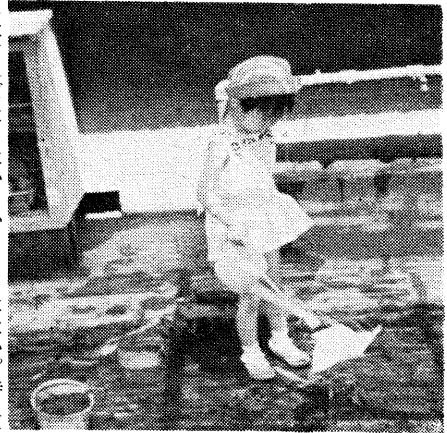
になってお客さまにいくなど、積極的に仲介する。など、その処置に工夫がいる。

入園当初のままごとの特徴は、乱雑さである。たくさんの玩具とおおぜいの子ども、しかもあそびは組織化されていないから、靴はぬぎすてられ、茶わん、お皿、ごちそう、人形と、畳の上に無秩序におかれ、歩く子どもは踏み散らす。このようなとき、あそびの外から注意を与えるという形でなく、教師もあそびの中で役割をとりながら「靴がめっちゃめっちゃだわ。お母さん、玄関はどこにしましゅう。お靴はこうやってきちんと並べておきましようか」「お茶わんがひっくり返ってお茶がこぼれますよ。おせんのにせておきましようね」「赤ちゃんがこんな所で泣いてるわ。ミルクがほしいんじやないかしら」などと、まわりを整えたり、「お母さん、おうちの車をきれいにしましうか」と促したり、「きれいになったわね」と注意を喚起したりしてみた。

そして一方、道具の数や種類を一時減らしてみたところ、乱雑さは、かなり減ったように思われたし、片づけもやりやすくなったようであった。

二学期は戸外での運動的なあそびが多かったが、寒くなって室内あそびが多くなると、広げたりじゅうたんや箱積木の船の中にままとコーナーの道具を引っ越してあそぶことが何日も繰り返された。全部の道具を引っ越したり片づけたりすることは、大人の目には大変であったが、子どもたちの、男女を交えての協力ぶりはめざまし

### 小さな試み



かった。三学期には、お母さん、お手伝いさん、お姉さん、赤ちゃん、猫などの役割も分けられ、あそびも楽しく続けられた。

### ○ その他

子どもたちは、いつも友達とあそばなければならぬということはない。時には、ひとりで、小さな思いつきをためすこともよいことである。ある日、M男は、作った風車を、草花の苗を植えるように、そっと砂場にうえた。近くにいたA子も、誘われたように自分の風車を砂にさした。そして、大事なお花に水をやるように、じょうろで水をかけた。風車はクルクルと少しまわったが、やがてぬれて動かなくなった。

三歳児ならではの、かわいらしい試みのひとこまであった。

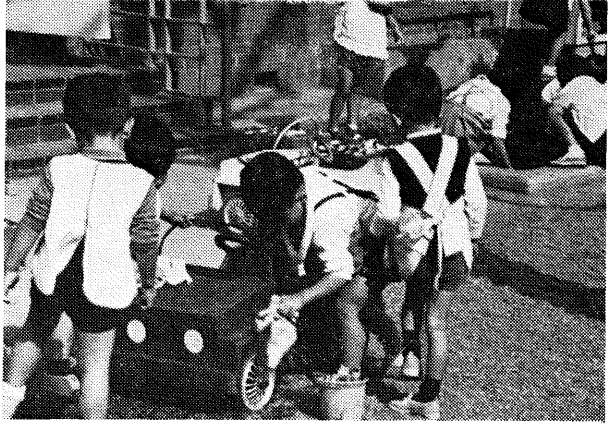
☆

☆

☆

男児たちは、お気に入りの木製自動車に乗ったり押ししたりしてよくあそんでいたが、ある時「ダンブカーだよ」といって、中に砂利を積み、上から水をかけて、自動車を泥んこにしてしまった。

自動車のお掃除やさん



「あらあら」という私に、「おうちで車お掃除する時、水かけるんだよ」と、しごく無邪気である。そこで、「それじゃ乗るところもお掃除する？」と難布をだすと、「借して、借して」と取り合おうようにして拭いてくれた。年長組の先生に「自動車のお掃除やさんか。うちのもして

下さい」と頼まれて、大張り切り。年長児に、「どうもありがとう。おいくらですか」「千円」「はい、では千円」と作ったおかねを渡されて、みんな、しごく満足のようであった。「車はみんなが乗るんだから、汚さないのよ」などと無粋なこといわずにすんでよかったと思った。

☆ ☆ ☆

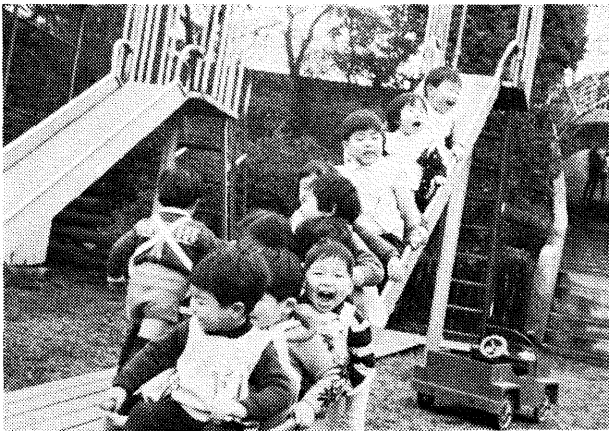
三学期ともなれば、子どもたちは、友だちといっしょであることが楽しくてしかたがないというようすになってきた。ひとりあそび、平行あそびの感じの強かったすべり台も、今は友だちと押しあつて滑ることが楽しい。

「満員電車だ」と大喜びだ。

以前は、自分の遊びを妨げる存在であった友だちが、今は、なくてはならないものになった。

やっと、あそびの生活が軌道になり、幼稚園生活の基礎ができたという感じのこの頃である。

来年度は、この生活を基盤に、更にいろいろな活動がくりひろげられることであろう。



ゆかいな満員電車